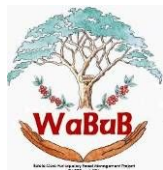


WaBuB PFM News

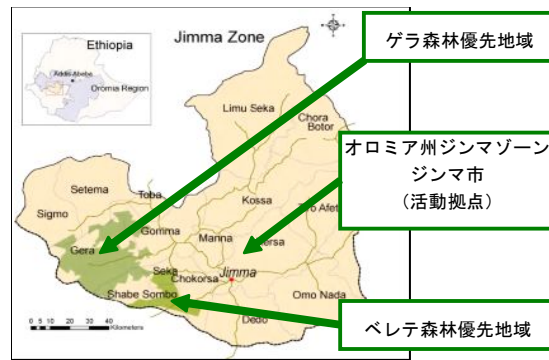
～Respect Local People's Knowledge for Sustainable Forest Management～



JICA 技術協力プロジェクト

エチオピア ベレテ・ゲラ参加型森林管理計画フェーズ2

2008年4月1日発行 (第16号)



なかなか雨が降りません…

例年ではすでに雨期に入っている時期なのですが、未だにまとまった雨が降り出しません。ベレテ・ゲラ地域の主な農産物であるメイズ(トウモロコシの一種)は、雨期の開始とともに種まきが始まります。それが今年は、畑を耕したままでなかなか種をまくことができません。WaBuB Field School(WFS)を訪れると、どこもまずは雨乞いのお祈りから始まります。エチオピアの中で最も雨量の多いこの地域でもこの状態なのですから、他の地域がどのような状況が非常に心配です。また、このまま雨が降らずに農民の生活に影響するようになれば、もはや森林管理(プロジェクト)どころではなくなるという懸念もあります。活動拠点のジンマでも、暑い日が続くだけでなく、計画停電(水力発電が主電源であるため)や断水(電気でポンプアップしているため)も多くなりました。恵みの雨を、皆が今か今かと待っています。

WFS 農民ファシリテーター研修 ～普及員に負けないぞ！～

10月から開始された WFS も早いもので約半年が過ぎ、卒業までに実施される52週のセッションの半分を終えようとしています。卒業までの目標は、前号でもご紹介した通り、「WFS に参加している全ての農民が、総合的な能力を向上させること」です。識字率の低さや文化的な要因(女性が公の場で発言しない、男性と女性が一緒にグループ活動をしないう、歌など自己表現することを抑制しているなど)により、なかなか思うように実施されていない所もありますが、中には、3 か月振りに訪れてみると、以前は黙って座っているだけだった女性が積極的に発言をしたり、自分たちで WFS の歌を作成したり、グループ活動がスムーズに行われているなど、目に見える変化が出てきている WFS があります。感触としては、WFS のファシリテーター(指導でなく農民の能力向上を後押しする立場)である各普及員の人柄や真剣さに大きく左右されているようです。



自分達の農園とどう違う？

4 月以降、普及員が他の集落で WaBuB(森林管理組合)を組織したりして忙しくなったり、中には WFS が中途のままで他の村へ異動させられた普及員も出てきており、全てを普及員に頼るのは難しくなってきました。そこで、現在 WFS に参加している農民の中から代表を選出してもらい、今後、普及員を支援しながら WFS を実施する「農民ファシリテーター」を養成するための研修を行いました。事前に各 WFS で「どんなメンバーが相応しいのか？」を話し合い、原則として男女1名ずつを選出してもらいました。しかし、「読み書きの能力」は、記録やレポートのために不可欠であることから重視したところ、選出された総勢109名の中、女性はわずか 13 名という状況でした。あるところでは、読み書きのできる女性が推薦されても、「子供もいるのに 1 週間も家を空けるのは夫が許さない」というケースもありました。女性の参加や能力向上は予想以上に壁が多く、時間がかかりそうです。



読み書きができなくても、絵を使って観察結果をまとめてみよう！



俺達の WFS ソングどう？

多くの農民がジンマに来るのは初めてで、少し緊張している様子でしたが、いざ研修が始まってみると、その積極さや真剣さは普及員顔負けです。毎回のように遅刻してきては早く終われとうるさい普及員連中とは違い、きっちり時間通りに来て、競うように手を挙げて発言します。特に喜んでるのが、実際の WFS への訪問です。今までに他の WFS を見たことが無い上、比較的うまく実施されている WFS を訪問先に選んだことから、かなり刺激になったようです。実際に訪問先俺達の WFS ソングどう？ の WFS メンバーに混ざりながら、野菜や苗木の観察・分析・発表という一連の作業を行い、「農園がしっかり整備されていて素晴らしい」「メンバーに活気がある」などのコメントがありました。ケニアからのマサイ専門家もご満悦で、「ベレテ・ゲラで始まったばかりの WFS の灯を、あなたの方で広げて欲しい…」と、締めくくりました。実施中の WFS を改善し、WFS を通じて農民の能力や生活を変えていけるのは、今回研修を受けた農民ファシリテーターの手に懸かっていると看しても過言ではないでしょう。



WFS の火は灯されたばかり！応援してるよ！！

WaBuB は、現地オロモ語で(地域住民により組織される)森林管理組合の略称、PFM(Participatory Forest Management)は参加型森林管理の略称です。よって、WaBuB PFM は、本プロジェクトが確立・普及を目指す WaBuB による参加型森林管理方法を意味します。

WaBuB 組織化の課題 ～住民との対立が発生！～

ベレテ・ゲラ森林優先地域内の 41 村で一斉に WaBuB の組織化を進めています。各村で境界確定作業(WaBuB 組織化のステップ7「WaBuB PFM News 7 号参照」)を始めて数週間がたった3月初旬に、ゲラ郡内西部に位置するチェリコ村、オバ村、ボルチョ・デカ村に配属されている普及員から連絡がありました。「住民が、WaBuB の組織化、その他の活動にも一切協力しない！」と言って、「これ以上、境界確定作業もフィールド・スクールも続けることが不可能になった」とのこと。一体、普及員と住民の間で何が起ったのやら・・・。



早速、ゲラ郡長、郡森林官、プロジェクト・スタッフとともに、問題の起った3村へ行ってきました。各村とも、150 名以上の住民が参加のもと集会が始まりました。まず、郡長から WaBuB 参加型森林管理の詳細説明があり質疑応答となりました。そうすると・・・「境界が確定されることにより、政府から新たな税金が課せられる」「家の周りに植えているユーカリの木も一切伐採できない」「家屋の新築は一切認められない」「森林を全く利用していない住民(森林優先地域外に居住)も強制的に WaBuB メンバーに登録させられ入会金をとられる」、そして「日本人が我々の森を買いに来た」等々、住民が一斉に口にした不安・不満は、住民による森林管理という WaBuB のコンセプトとはかけ離れたものであり、誤解や噂が積もり積もって、住民と普及員の関係がこじれてしまっていた・・・というのが現状でした。

普及員が WaBuB 参加型森林管理に関して十分に理解しないまま、間違った情報を住民側に伝えてしまったこと、住民との十分な合意形成プロセスを踏まなかったこと(ステップ3～5)に根本的な原因はありました。総面積 17 万ヘクタールにも及ぶベレテ・ゲラ森林内の 41 村で一斉に WaBuB の組織化を進めているので、村々に配属されている普及員のやる気や資質によって、このような問題が起ることはある程度想定していたのですが、やはり、郡行政官、プロジェクトによる、普及員に対するもっときめ細かなサポートが必要だと感じています。

帰国にあたって

2004 年 9 月にエチオピアへ着任して以来、早いもので3年半が経ちました。当時は第1フェーズが2年目に入り、皆さんにもお馴染みのゲラ森林のアファロ集落とベレテ森林のチャフェ集落で WaBuB の組織化に向けた活動にとりかかったころでした。その当時は、まだ WaBuB という名称もなく、「森林管理組って何？森林管理契約??」等、住民代表と行政官、プロジェクトが、ベレテ・ゲラ森林とそこに住む人々の生活様式に最も適した森林管理の仕組みを、試行錯誤しながら組み立てていたころだったと記憶しています。

そして、それらの苦労と努力の上に、3年半がたった今、WaBuB という名前も定着し、ベレテ・ゲラ森林内の 41 村で新たな WaBuB の誕生が目の前に迫っています。そして、当時は、郡の森林官(行政官)数名と対象村2村に配属された普及員という、限られた人数で孤軍奮闘していましたが、今は、若くて元気いっぱいの 60 名近い普及員が、WaBuB の組織化、WaBuB

Field School の実施、森林コーヒー認証に向けた活動等、現場での実施を担ってくれています。

とはいえ、まだフェーズ2も開始から1年半がたったばかりで、折り返し地点にもいたっていません。さまざまな問題点も見え始めており、これらの課題に対処し、プロジェクト後半に向けて舵取りを修正する時期にきているようです。しかし、心配はしていません。これまで一緒にやってきた郡行政官やプロジェクト・スタッフ、JICA 専門家が、皆で知恵を出し合うことで、どんな問題にも対応していけると思っています。

気候変動等、地球環境問題が全世界で議論されている昨今、エチオピア国内でも貴重な森林生態系を有するベレテ・ゲラの森、そして、そこに住む人々の生活・生計を尊重しながら、大切な自然資源を守り、末永く利用していく・・・そんなプロジェクトのコンセプトは、非常に意義のあることだと思っています。これからのプロジェクトの進展を楽しみにしながら3年半を過ごしたエチオピアを後にします。

WaBuB PFM News 読者の皆様からは、さまざまなご意見や貴重なアドバイスをいただき、本当にありがとうございました。私も、これから一読者として、WaBuB を応援していきたいと思っています。

西村 勉 (チーフアドバイザー・農村開発専門家)

ベレテ・ゲラの有用樹種



Kerero (*Aningeria altissima*)

ベレテ・ゲラ森林の中の集落を訪れると、決まって目につく高い木があります。エチオピア南西部の高地に多く自生するカラロ(アムハラ語の呼称)は、湿潤な気候と 1000-1700m の高地を好み、ベレテ・ゲラを代表する樹木とも言えます。樹高は40m以上にもなり、特に集落周辺では最後まで切らずに残されている樹種なので、「カラロが切られるとかなり木材や薪が不足してきている」という一種のバロメーターになります。農地の脇に切り倒されたカラロの上に立ち、力いっぱい斧を振りかざしている小学生くらいの女の子の姿を、ある集落で見かけました。高地での夜は冷え込み、暖を取るために薪は欠かせません。私もカラロの暖に救われた身であり、生活のために木材や薪が不可欠であることを痛感しました。個人がいくら意識を高めて森林を大切にしなければならないと理解しても、生活に密接に関わるものであればその抑制には限界があります。日本での温室効果ガスの排出も、きっと同じ理屈なのでしょう。一人の女の子では森を守れなくても、村人同士が知恵を出し合い、政府の協力を得ながら組織力を強化し、森の管理や計画作りができるようになれば、いろいろな可能性が広がります。それが、我々の目指す WaBuB です。



美味しそう？カラロの種